

仲間の一員としての「私」の在り方[†] —子どもと大人が共に規範意識を高め合うために—

渡辺 浩行*・五十嵐市郎**・小平 享子**・高根沢伸友**
星野さやか**・坂本 修子**・長谷部せり**・岩淵千鶴子**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

「仲間の一員としての『私』の在り方」を研究主題に掲げ、今年度は研究の3年次である。1年次には副主題を「大人の意識の在り方を問う」とし、幼稚園、小学校、中学校と、それぞれの時期にかかわる大人が規範意識を育てる上で大切にしていることに違いがあること、また、普遍的に大切に考えていることがあることが明らかになった。2年次には、「小・中学校へつながる規範意識」を副主題に、発達に応じた子どもたちの「豊かな体験」について探り、幼稚園、小学校、中学校と12年間の育ちの中で、仲間の一員としての「私」の在り方が変容していく場面が見いだし、それぞれの時期の発達に応じて必要な教師の支えが明らかになった。これら2年間の研究を受け、規範意識の変容という視点から、幼稚園でこそできる体験とは何かを明らかにするという、また、保護者に温かく見守られ家庭で育つことが幼稚園生活の基盤となることから、基本的なしつけや受容される経験など、家庭において必要な経験を保護者と共に考えること、が課題となった。そこで、大人の意識の変容が子どもの変容を導くという考えを念頭に置きながら「規範意識を高め合うための家庭との連携」と「規範意識を高め合うための幼稚園の役割」の2つについて研究を進めていく。

キーワード： 規範意識、変容、家庭と共に、心の動き、教師の支え、学び合い

1. 研究について

(1) 規範意識を高め合うための家庭との連携

家庭との連携にあたり、保護者の幼児期の教育に関する理解を深めることが大切であると考え、保護者との情報交換の機会や、幼児の姿(育ちや発達等)について共に考えることを繰り返してきた。日々の中で幼児の様子や成長を伝えることに加え、懇談会や保育参観の機会を積極的に活用し、「学級懇談会」や保育参観の折に行われている「エピソードトーク」の実際を記録し、考察をしていくことを積み重ねた。その際、教師が一方向的に話をするのではなく、保護

者同士が子育てについての悩みを共有したり、ある場面での子どもへの対応の仕方を考え合ったりすることを大切にしてきた。機会や回数を増やすことだけではなく、会の進め方を工夫することで、互いに本音が言い合える関係をつくっていくことも重要であると考え、様々な取り組み方をしてきた。

また、保護者が主体となる活動の場を増やしていくことで、保護者の保育参加も積極的にしてきた。保護者自身が、幼児の活動を見ることや、幼児の活動にかかわることは、保護者にとっても幼児にとっても充実した幼稚園生活をつくる。また、保護者同士のかかわり合いが増えることで、保護者同士が情報交換したり、学び合いを起こしたりすることもあつた。規範意識を高め合うきっかけとなる機会や場を幼稚園が提供し、共に考えていくことが、保護者の意識の変容や実際の幼児へのかかわり方にもつながり、さらに幼稚園生活が充実することにもなる。

[†] Hiroyuki WATANABE*, Ichiro IGARASHI**, Kyoko KODAIRA**, Nobutomo TAKANEZAWA**, Sayaka HOSHINO**, Shuko SAKAMOTO**, Seri HASEBE** and Chizuko IWABUCHI**: Children Learning Roles of Group Members. - For Children and Adults to Mutually Enhance Normative Consciousness -.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** Utsunomiya University Kindergarten

(2) 規範意識を高め合うための幼稚園教育の役割

昨年度までの研究からも明らかになったことだが、子どもの発達段階にふさわしい規範意識の形成が、学びや発達の連続性を踏まえて長い見通しで行われていくことは重要なことである。幼児期の規範意識がどのように芽生えてくるかを考えるということは、規範意識を高め合うための幼稚園教育の役割を考えることにつながっている。

今年度の研究では事例をもとにそのことについて考えていくこととした。規範意識の芽生えや規範意識を育むということを視点に事例を拾い、子どもの気付きやそのための状況作り、教師の役割について考え規範意識に対する考察を深めてきた。規範意識を育むこと、つまり規範意識の変容をもたらすことは、教師が教えこむことではないと考える。子ども自身が気付くこと、つまりは自覚や関心をもつことを大切にしながら日々の体験や環境を整えることを大切にしてきた。事例から考察を深めていくことで、幼児期教育の役割や、幼児期にどのように規範意識が芽生えていくのかを考えていくこととした。

2. 研究の内容

(1) 規範意識を高め合うための家庭との連携

① 「学級懇談会」の意義と実際

年間6回の保育参観の他に、3歳児学級と4歳児学級において年間1回(9月から10月上旬)学級懇談会を設けている。登園時から正午までの約2時間から2時間30分ほどの時間を学級担任と保護者で話し合う。

なぜこの時期なのかといえば、4月～7月頃の保護者の関心事は、子どもが新しい環境になじんでいるか、新しい幼稚園の教育方針は、担任の人柄は等「個」への関心が高い。しかし9月中旬頃になると、自己発揮しだしたからこそ友達とのトラブルや、運動会等の行事を通して気付く友達の中での行動の差異などから、個々の保護者から同様の内容の相談が増え始める。また、この時期になると、運動会での保護者の競技の練習等、学級の保護者とのかわりも増えてくる時期であり、個々の保護者の語り合いの場として、悩みを共有していくよい機会であるととらえた。

学級担任との1対1の相談から「悩みを共有する保護者同士」の関係の中で、我が子への関心だけでなく、少し視野を広げ、他の保護者の子育ての考

方や子どもへのかかわり方にも関心をもち、これまでの自分の子どもへのかかわり方や教育観について振り返る機会になることを願っている。

このような学級懇談会の意義をふまえ、3歳児学級と4歳児学級において学級懇談会を実施した。

1) 子育てでの悩みを一人ずつ発表する

それぞれの学級に応じて、子育てでの悩みが異なることが明らかになった。それは、今、目の前にいる子どもの発達や成長を見ているからこそ違いだといえる。保護者の意見は、どれもその時期の子どもの発達にそっており、そのことを保護者同士で話し合うことこそが、子どもの発達や見通しを考えるきっかけになると考える。

2) 全体で話題(悩み等)を共有し、話し合う

それぞれの悩みを発表した後、それを全体の話題として話し合う時間を設けた。自分が悩んでいることを全体で考えることは、目の前の子どもたちの発達を支えることにもつながる。それぞれが悩みを発表すると、大半の保護者がうなずいて聞いていた。悩みを分かち合うことは単純に「自分だけではない」と思える安心感や「一緒に考えられる」という心強さがあるだけでなく、目の前の子どもの発達に真剣に向き合うことにもなる。実際に話し合いをしてみると、全体で共有して意見を出し合った後では、考え方が変わったとか変えてみようという保護者が多かった。以下に、話し合い後の保護者の感想(記録用紙から抜粋)を載せる。

3年保育3歳児学級

同じ3歳児の子どもの悩みにうなずくことばかりでした。これからは一息置いて対応する、成長を楽しみながら育児していくなどを実践していきたいです。また、「見守る」を心がけていきます。

3年保育4歳児学級

親として不安に思っていることがありましたが、皆さんの悩みや先生の話聞いて、4歳児の発達、成長の表れなんだと知ることができこれからの対応を見直すことができそうです。

学級懇談会を通しての感想からも分かるように、保護者同士が悩みを語り合ったり、意見を交換したりすることは、大いに意味がある。第1子の子どもと向き合っている保護者、第2子、第3子の子どもと向き合っている保護者が意見を交換することで、

お互いにホッとしたり納得したりすることもある。また、兄弟がいる中で子育てしている保護者、そうではない保護者など、立ち場は違えど同じ悩みをかかえることもあり、いろいろな立場、環境から子どものことを考えることがなによりも子どもを見守っていくことになる。幼稚園としてもこういった機会を大切に、保護者同士の関係を深めながら、家庭と共に子どもの育ちを支えていきたい。

②「エピソードトーク」の意義

保護者にとっての一番の関心事は、日々の幼稚園生活の中で繰り広げられる我が子の実際の活動する姿であるが、「今日は〇〇をしていた」というだけでは、その活動の楽しみや体験の内容、関心の広がりや深まり、発達上の意義等、子どもの育ちについて大切なところが伝わらない。そこで、年間6回の保育参観時に「最近の子どもの姿」として学級でのエピソードを紹介し、子どもの育ちにとっての意義や小学校以降の教育にどのようにつながるのか等、紙面上で丁寧に説明してきた。しかし、保護者には、これら発達におけるの重要性がなかなか伝わらない。それは何故なのだろうか。知らせることを中心とした一方的な説明に終わっていることを反省し、一つのエピソードについて個々の保護者の考えを十分に聞き合い、考え合うことを通して、様々な考え方や対応、子どもの発達（成長）の筋道等について自分から気付いたり感じたりすることができるように話し合う時間をとるようにした。また、子どものエピソードについても紙面上ではなかなかイメージできにくいこともあるため、VTRやDVD等も活用するように工夫している。それぞれの年齢において、各時期に大切な子どもの発達を考えるにふさわしいエピソードを提供し、教師や他の保護者と共に語り合う時間を提供することにより、保護者が幼稚園を信頼し、安心して子どもの園生活を見守っていけるようにしていく。

○エピソードトーク「最近の子どもの姿」をもとに

保育参観後の懇談会で、担任が日常の園生活での出来事からエピソードを紹介し、それぞれの場面での幼児の姿について考え、保護者同士が話し合うエピソードトークの時間を設けている。教師は、「これがこの時期の子どもの姿だ。」「こういう子どもの姿を保護者に理解してほしい。」などの意図を持ち、それにふさわしい場面を日常の保育の中から選

び、エピソードとして提示する。また、保護者から園生活に関する疑問や悩みなどが寄せられることも多く、それをひも解くカギとなるような場面を選ぶ場合もある。たとえば、「最近、幼稚園でけがをして帰ってくることが多い。誰かにいじめられているのではないか。」「けがを隠している。どうしてなのでしょう。か。」というような悩みが寄せられたことから、園児のけがに対する様々な反応についてのエピソードを紹介した。できるだけ身近な出来事を取り上げることにより、保護者がイメージしやすく、主体的に考えられるようにしている。

以下にエピソードトークの流れを示す。

①エピソードの提示

ワークシートを配布し、教師がエピソードを読み上げる。必要に応じて説明を加え、場面の状況を保護者が把握しやすいようにする。

②感じたことの記入

エピソードを読んで感じたことを保護者が記入する。驚いたことや疑問に思ったことなど、率直に記入する。

③グループでの話し合い

保護者が記入した感想や意見をもとに、5～6人程度のグループで話し合う。エピソードの内容に合わせて、兄弟の有無や経験などそれぞれの保護者の立場や環境を考慮して意図的にグルーピングすることで様々な考えに触れ、話し合いに幅が出る。

グループで話し合った後、さらに学級全体で各グループでの話し合いの内容を伝え合い、共有する。

④話し合い後の感想の記入

今後、家庭でどのようなことを大切にしながら子育てをしたらよいか、子どもとどのようなかわり方をしようと思うかなど、話し合いを通して感じたことや考えたことなどを記入する。

⑤教師からの話

最後に、担任から、幼稚園で大切にしていることや家庭で大切にしたいことなどを保護者に伝える。

※これらの流れは、保護者の実態などに合わせ、各学年や学級によって、進め方や時間の配分、話し合いの持ち方などを変えて実施される。

幼児の日常の姿を映し出したエピソードをもとに、保護者一人一人が考え、その考えを出し合って話し合うことで見えてくるのがいくつかある。

まず、その学年や時期ならではの子どもの姿を知ることができる。我が子の話や保育参観時だけでは見えない日々の幼稚園生活での幼児の姿が、紹介されたエピソードには表れている。その日常の姿にこそ、その時期本来の幼児の姿がある。エピソードの中の幼児の姿と我が子とを照らし合わせ、「今まさにこういう時期に差し掛かっている」と納得したり、

「やがてこういう時期が来るのだろう。」と予測したりすることで、我が子を見つめ直し、発達の筋道に気付くこともできる。また、幼稚園という集団生活の場で見られる幼児の姿もまた、保護者にとっては新鮮に映るのではないだろうか。友達とのかかわりの中から生まれる自己表現、コミュニケーション、思いやり、仲間意識、トラブルやその解決方法など、家庭では見られない姿から、子どもに対する新たな気付きがあるものと思われる。このように、今まで保護者が気付かなかった幼児の姿に触れた時、疑問に思うことや納得できないことも出てくるであろう。それが初めて目にする姿であれば尚のことである。自分の感じたことや考えを他の保護者と交換し、話し合うことで、その疑問が解決されると、幼児の姿や発達についての理解も一層深まる。

さらに、そのような時に、親としてどのように子どもの姿を受け止め、どうかかわればよいのかなど、家庭で大切にしたいことを他の保護者と共に考える機会ともなる。経験のある保護者から話を聞いたり、別な視点からの考えに触れたりすることにより、多面的な見方や様々な考え方、対応ができるようになるであろうし、また、自分と同じ考えの保護者の存在によって、安心感が生まれる。そして、ゆとりと自信をもって子どもと向き合えるようになるのではないだろうか。このように考えると、親同士がコミュニケーションをとることも、子育てにとって重要である。いろいろな立場、経験、価値基準、考えの人と話し合うことにより、保護者の考えが修正されたり変化したりして、それが子どものプラスの変容へとつながるものと考えられる。

エピソードトークが意味あるものになるためには、保護者一人一人が自分の考えをもち、話合いが展開しやすいことが重要である。身近な場面をエピソードに選び、保護者がシミュレーションしやすいように努めてはいるが、紙面と担任の話だけではイメージしにくい場面もある。また、ここで紹介されるエピソードは、その学年・学級のものであるので、今の子どもたちの状況を把握するにはよいが、以降の発達の見通しをもつためには、もっと先の時期のエピソードも必要となるだろう。以上の点を考えると、エピソードの選択や提示の方法には十分な考慮と工夫も必要である。

○エピソードトーク VTR を活用して

前項で、「最近の子どもの姿」をもとにしたエビ

ソードトークについて述べたが、この項では、「VTR を活用したエピソードトーク」についてふれていく。VTR を活用したエピソードトークでは、意義でふれたように、紙面上ではイメージしにくいことなどを、実際の映像を見ることで具体的な場面をイメージしながらエピソードトークを行うということを主としている。

子どものエピソードが映像化されたものを見ることによって、子どものありのままの姿をイメージしながら話をすることができる。発達の見通しについて教師から話を聞くことも大切なことであるが、こうして子どもの姿をもとに保護者が自分の子どもとすり合わせ、子どもの発達について考えたり、また保護者自身の立場や経験をもとに話をしたりすることが、今後の子どもの育ちや自分の子どもとの接し方を考えるきっかけにもなる。

実際に話し合ってみると、多様な意見があることに気付いたり、自分が思っていたことが他の保護者からの意見をきくことで変わっていったりする。結論が出たり、正解があったりすることではないが、エピソードをもとに発達や育ちを考えることは自分自身の子育てや考えに多様な考えをもたらすよい機会になると考える。幼稚園でも積極的にこういった機会を設け、家庭と共に考えることを大切にしていきたい。

③ 保育参観で子どもの見方を学んで

～保育参観の工夫から～

本園では年間6回、保育参観及び参観後の懇談会を設けている。保育参観資料には、本日の保育内容・参観のポイント（視点）・最近の子どもの姿とその発達の意味を掲載している。これらの方法については、子どもを理解してもらう手掛かりとして工夫してきた結果である。それにもかかわらず、「幼稚園では何をしているのかを知りたい」という要望が多い中、参観できる場面を提供すると意外に子どもの姿を見ようとしていないのは何故だろうか。一方、1学級を全保護者で参観するという方法ではなく、1学級に2～3人ずつ1日を通して保育者として参加するという参加型の方法をとると、保護者側に様々な気付きがあることも分かった。

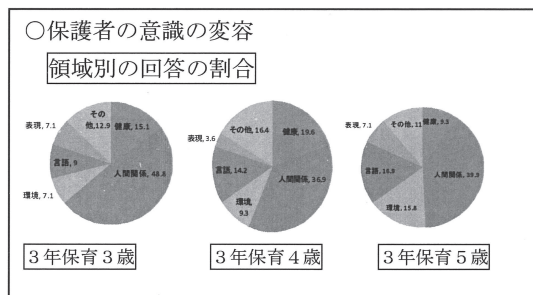
様々な方法を駆使し、子どもの理解、保育の理解、幼稚園への理解、幼児教育への理解を薦めている。

1) 保育参観の工夫の実際

年間6回の保育参観のうち、後期の1回を「よいところ10個さがし」の機会にあてている。具体的には、保育参観当日に記録用紙を配布し、保育を参観しながら子どもの成長を感じた内容を保護者が記入するというものである。ここでいう‘子ども’とは我が子に限るものではない。保育参観の様々な場面で学級全体の子どもの様子を見ながら自由に記述していくものである。保育参観後には、小グループの中でそれらの記述を保護者同士が読み合い、子どもたちの成長を共感することができるための機会をつくっている。

2) 記述の内容から保護者の意識の変容を探る

ここでは、3年保育児保護者の‘よいところ10個みつけ’の内容について、全体的に見た3年間の記述の内容の変化に注目する。多様にある保護者の記述の内容を幼稚園教育要領の領域に照らして整理することで、保護者が子どものよさを感じる場面やその傾向を形あるものとしてとらえることができるものと考え、学年をおっての傾向を比較しながら、保護者の意識の変容を探っていくことにする。



保育参観は年間に数回の実施となるのが一般的な見方である。保育参観は保育の営みの一部のみを参観する機会となるため、参観時の活動の内容や状況によっては、保護者が子どもたちの成長を垣間見る根拠も異なってくる。外遊びが中心の保育参観であれば、進んで戸外で遊ぶ楽しさを感じている姿に対する記述が増え、植物の栽培に関心が高い時期であれば、身近な植物に親しみをもって接し、いたわる姿に対する記述が増えるだろう。しかし、あえて「よいことを10個見つける」という視点を投げかけることで、限られた保育参観の機会を重ねる中から、保護者が広い視野で子どもの成長を感じるようになっていく。また、それらは幼稚園教育要領の領域の中に示されるように、私たち保育者が子どもたちの中に期待する育ちの多くを網羅している。子どもた

ちのよいところをたくさん見つけようとする視点を投げかけることは、幼稚園で何を育てようとしているのかということの保護者の理解を促すことと深く関わっている。

また、学年ごとの傾向はあれども保護者の関心の中心は領域『人間関係』の中にある。集団の中にあつて、我が子が教師や友達という周囲の人間とどのようにかかわり、遊びや生活をすすめているのか。しかし、個々の成長は人のかかわりのみで見られるものではない。その子らしい生活の進め方や自己発揮の有り様、興味・関心を含めた身近な環境へのかかわり方、イメージの豊かさや表現の仕方等々、子どもたち一人一人の育ちを見る視野をさらに広げることが望まれる。特に領域『環境』や『表現』に関連するようなよさを、具体的な子どもの姿から見て取れるような工夫をしていくことが、私たち保育者の課題と考える。

④「ほほえみバンク」の意義

「ほほえみバンク」とは、保護者の得意分野を登録し、子どもたちの活動の充実や園環境の充実のために、必要に応じてボランティア活動を行っていくPTA活動の一つである。今年度は、読み聞かせ部、ガーデニング部、コーラス部、クッキング部、遊具修理部が実施されている。その他、年によっては野外活動部、国際交流部等保護者の特技や趣味によって柔軟に組織されている。運営は保護者主体で連絡調整役として教員も加わっている。

ボランティア活動も目的の一つではあるが、それぞれが活動の企画や実践を通して様々な保護者とのかかわりをもったり、企画・計画に際しては子どもの発達を理解したり、実施にあたっては自分の子ども以外の子どもの姿を知ったり、他の保護者や教師の子どもへもかかわり方を知ったり等、活動を仲介とし、子どもへの理解を深めていくことを目的としている。

ここでは、「ほほえみバンク」の中のクッキング部の活動を通して保護者がどう意識を変容していったかについて述べていく。

○自分の視野が広がる・深まる

保護者は、おやつ作りやクラスの配膳に行く中で、いろいろな子どもたちと接することができる。また、自分の母親が来ている時には、うれしくて、何度も母親の姿を覗きに行く子もいる。保護者のほりきつ

ている姿を見て子どもがはりきる、その姿を見た保護者が子どもを肯定的に受けとめるきっかけにもなる。クッキング部の活動は、保育参観や園行事ではない、素の子どもの姿を見られる機会である。子どもが目を輝かせて遊びに没頭している姿や友達と折り合いをつけながら遊びをすすめていく姿、教師が子どもにかかわる姿、幼稚園の遊びの環境などを実際に見て、幼稚園生活を共にしながら、保護者自身の視野が広がったり深まったりし、これまでの自分のあり方を振り返る機会となっている。

○保護者や教師とかかわり気付く・学ぶ

クッキング部は、保護者たちが協力し合い、その日のおやつを限られた時間内に作っていく協働的な活動であり、保護者や教師が子どもたちに接する姿を間近に見る機会でもある。先輩の保護者が、子どものペースに合わせながら一緒におやつ作りをしている姿などを見て、日ごろの自分の子育てをふりかえるきっかけにもなっている。また、保護者たちは一緒に活動する中で、食べ物の話から子育ての話題になっていくことがよくある。面と向かっては話にくいことも、作業をしながらであると自然と素の自分を出し合う姿が見られる。試食タイム（おしゃべりタイム）の時には、その日の子どもたちの様子や保護者同士の子育ての悩みを気軽に話し合い、なごやかな雰囲気となっている。自分の思いや行いを受けとめてくれる人や場がある心地よさを感じ、保護者や教師とかかわり合いながら、気付き学んでいこうと意識していくのであろう。

○保護者の意識が変わる・自分の在り様が変わる

クッキング部の保護者たちは、子ども達が好み、食べやすく、楽しみとなるようなおやつにしたいとの願いから、量や味付けの工夫はもちろんのこと、幼稚園全体の子ども達のことを考える機会となっている。「こんなおやつにしたら子どもたちが楽しみに幼稚園にやってくるのでないか」とか「食物アレルギーがある子もこう調理したら一緒に食べられる」などの話題が出ている。また、登園の際に幼稚園の門で母親から離れられなくて泣いている子には「今日はおいしいおやつがあるよ」と声をかける姿も見られたりする。クッキング部の保護者たちは、手作りおやつを楽しみにしている姿を見たり、子ども達から喜ばれたり感謝されたり、他の保護者から好評だったおやつ作り方を教えてと頼られたりしている。自分のしたことでも周りのみんなから喜ばれ

たり感謝されたり頼られたりする経験が、はりきり、やりがい、存在感を感じ、自分がよりよくなるよう意識することにつながり、クッキング部の活動を通して、新たな自分の価値が生まれる機会となっている。

⑤ 講話会をきっかけとして

～講話会の意義と保護者の変容～

これまで、保護者の意識啓蒙・意識高揚を目的に幼稚園側が主体となり講演内容や講師を選んでいたが、「家庭と共に」という視点から、講話会の方法や内容、人選を保護者会主体とし、保護者のニーズに応じていくようにした。そうすることで、保護者は自ら積極的に地域の講演会に参加したり、図書を検索したりと情報を収集し講話会を企画するようになった。講話会自体も有意義ではあるが、企画する過程での情報収集や保護者同士のコミュニケーションにも大きな意義が認められる。また、幼稚園の研究の取り組みを紹介したり、研究や講話会、エピソードトーク等のテーマをリンクさせたりすることにより、幼稚園と保護者で共に考えていきたいという幼稚園の姿勢が伝わり、幼稚園で今、大切にしたいことが共有され、保護者の中に学び合いの姿が見られるようになってくる。話を聞いて終わりというだけの講話会ではなく、一つのきっかけとして他の活動へ広がっていくことを期待している。

1) 講話会後の保護者の意識の変容

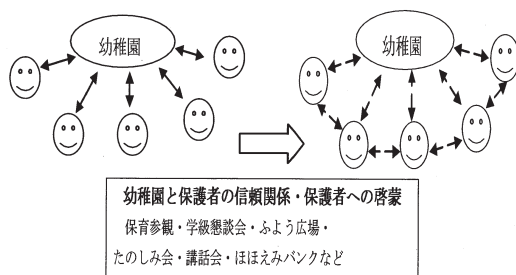
講話会で専門家からの話を聴いて、これまでの子育ての自分の思いと共感や同感をしたり、新たに気付いたり、今後気をつけていこうと自覚するなど、様々なことを学ぶきっかけとなり、保護者の意識が高まる機会となっている。もし、講話会が、幼稚園で一方的に主催したものであったならば、ここまでの保護者の意識を高めるものとはならなかったであろう。保護者が中心となって、講話会を企画・運営することに意味があるのである。

講話会後は、保護者同士が数人集まると講話会で聴いた話題で話している姿が見られるようになっていった。それまでは、さほど話す機会がなかった保護者同士であっても、講話会という共通な話題があることで話をするきっかけとなり、保護者同士の横のつながりができ始め徐々に広がり、保護者同士のネットワークとなっていった。また、講話会は、保護者の規範への意識を高揚させるきっかけとなり、

その後、幼稚園で行った学級懇談会、保護者会時にクラス内で同じテーマで互いの子育て観を話し合う機会をもったことから、保護者同士が本音で話し合い、互いに刺激し合い、自分達で学んでいこうとする姿、互いに学び合っていく姿へと変わっていった。

2) 学び合いが起こる基盤となるもの

- ・学級懇談会、保育参観等を実施したことで自分の思いや悩みを話す機会が増え、共通の話題で話し合えるようになった。
- ・初めは幼稚園と保護者といった一対一の関係から十分に信頼関係を作り、保育参観や学級懇談会・ふよう広場、講話会、ほほえみバンクなどを通して、保護者同士の横のつながりが生まれてきた。



- ・専門書やテレビ等から得た情報で子育てのアドバイスとなるようなことがあるとみんなで共有しようとする雰囲気や素地ができています。
- ・自分たちのニーズの合った講話会を主体的に企画する機会があることで、自分達の子育ての悩みを共有し、解決しようと意識する。積極的に本を読んだり話を聴いたりなどして講師を自分たちで探す機会となっている。
- ・講話会を聴き、自分たちの子育ての思いが共感され、悩みが軽減し、今後の見通しがもてるようになり、子育てに前向きになった。保護者の意識が高まりもっと学びたいと思うきっかけとなった。
- ・単に、講話会を実施しただけでは、学び合いは起こってこない。講話会や学級懇談会、保育参観などを積み重ねていくことで、幼稚園で大切にしたいことが保護者と共有され、保護者同士も刺激し合い学び合っていく姿が見られるようになった。

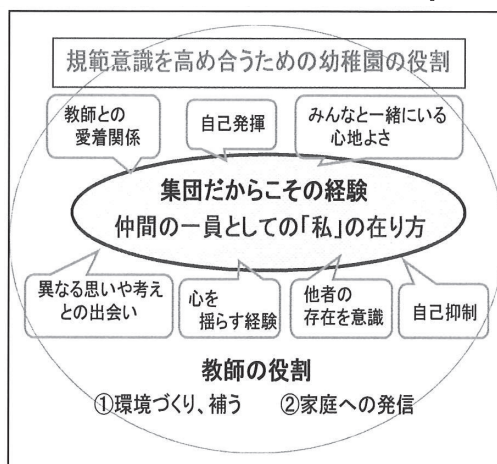
(2) 規範意識を高め合うための幼稚園教育の役割

これまでの研究から、幼児期の多様な経験による心の揺れが以後の規範意識の変容に大きく影響することを導きだし、幼児期の様々な感情体験の重要性について述べてきたが、同時に幼稚園でこそできる

体験とはどのようなものであるのか、家庭での必要な経験はどのようなものであるのかを明確にしていくことへの課題を残してきた。

幼児の規範意識の芽生えを支えるために、家庭と幼稚園はその両輪としてそれぞれに重要な役割を担っている。目の前にある幼児の成長を支えるための具体的な保育の営みと共に、規範意識の芽生えに関して教師が補うこと（知らせたいこと）、家庭との連携（家庭で育てること）という視点を改めて加えながら、事例を通して規範意識を高め合うための幼稚園教育の役割について、考察を深めていった。

下の図は、規範意識を高めあうための幼稚園の役割として、事例から導きだした集団だからこそその経験の内容と教師の役割を表したものである。



集団だからこそできる経験は他にも、マナーを守って行動してみることとか、絶対にしてはいけないことを知ることとかも挙げられるだろう。

それらの経験は、家庭とは離れた新たな集団の中にあって、親とは異なる教師のかかわり、同年代の幼児のかかわりを通してこそ生まれたものである。家庭の中だけでは味わうことのできない心の揺れを経験すること、ときに教師に補われながら内面的な動き（気付き）を重ねること、そこに集団としてある教育の価値を見出すことができる。一人一人の幼児が、集団の中でそれらの経験を重ねながら真に育っていくために、適切な状況を作り、必要によっては教師が補いながら、規範意識の変容を促していくことに、幼稚園教育の役割として大きな意味合いを含んでいるのではないだろうか。

同時に、家庭とは離れた集団の中でそれぞれの幼児が示す姿は、日常の保育の中で私たち教師こそが具体的にとらえることができる。具体的な事象の網

目の中から幼児の内面の動きを見取り、その子にとってどのような経験が必要であるのか、家庭の中でどのようなことを育てていく必要があるのか、教師の見取りを保護者に発信していくことも私たち教師の大切な役割である。それがあってこそ、園と家庭とがその幼児の育ちを支えるための両輪として機能するものとなるであろう。

3. 成果と課題

(1) 研究の成果

規範意識を高め合うための家庭との連携の実践では、それぞれの実践において改めて意義を見直し、実践することに大きな意味や成果があった。なぜその時期に行っているのか、教育的な意味や発達の見通しはどうかかわっているのか、家庭に何を伝えることをねらいとしているのか等、改めて見直す中に幼稚園の役割と家庭で大切にしたいこと、また、幼稚園と家庭で共に幼児の生活を充実させることの大切さが明らかになった。実践を通して「幼児の生活を充実させるために何が役に立つか」、「幼児の発達にとってどうすることがよいことか」等幼児を中心に据えて考えることの大切さについても改めて考えることとなった。幼稚園において、一人一人の幼児が安定した情緒のもとで十分に自己を発揮し、幼児期にふさわしい生活が展開できるようにすることが求められている。幼稚園が家庭との連携を図るのはあくまでも一人一人の幼児がこのような生活を実現するためであり、だからこそ、一つ一つの事柄について、それが幼児の発達にどのような意味をもつかを家庭と共に考えることが必要になってくる。家庭との連携というと、幼稚園側が主体となって家庭に知らせていくことや伝えていくことを中心に考えがちであるが、本研究では「家庭と共に」ということを大切にして実践を積み重ねてきた。それが大人の規範に対する考え方を固定化したり形骸化したりせずに、自分たちも規範意識を変容させ、高めていくことになり、幼児の規範意識の変容にも大きくつながったと考える。これは、今までの連携という考えを大きく変えることにもつながるだろう。だからこそ、保護者間からの学び合いが起り、保護者同士が幼児の生活を充実させることに真剣に向き合う姿が生まれたのだと考える。こういった意識の変容からの言動の変化は研究の大きな成果であろう。

規範意識を高め合うための幼稚園教育の役割の事例検討においても、改めて「規範意識は教えるものではない（教えられるものではない）」ということを明らかにすることができた。事例の考察からも明らかになっているよう

に、規範意識というものは幼児自身が気づき、感じ、思い、それが言葉や行動につながっていくことだと考える。もちろん足りないことを大人が補うことはあるが、幼稚園教育の役割として規範意識を教え込むことを規範意識が育つと置き換えてしまうことがないようにしなければならぬことを明らかにすることができた。まずは、子どもの育ちを支えることからはじめ、子どもの内に、規範意識に対して知識や技術ではなく、心を動かしていくことを幼稚園の大きな役割として考えていきたい。

(2) 今後の課題

これまでの研究から、幼児の規範意識の芽生え、その後、規範意識が変容していく背景には、幼児にかかわる大人一人一人の規範に対する考え方が大きく影響することが分かった。また、幼児、児童、生徒の発達やその時期の特徴に応じて、どうかかわり、子どもをどう支えていくのかということの重要性も明らかとなった。さらには、家庭と共に子どもの規範意識を高め合うための実践を積み重ねることで、幼稚園と家庭との役割についても深く考えていくことができた。

幼稚園は幼児にとって、教師との信頼関係を基盤にしなが、遊びを中心として生活を創っていく場である。また、幼稚園での充実した集団生活が生涯にわたって心身の健やかな発達の基礎ともなっていくと言える。一方で、家庭は、十分な愛情や思いやりを受けて安心して過ごせる基盤となる場である。幼児はそういった基盤があるからこそ豊かな体験の中で規範意識を変容させていく。幼稚園と家庭は双方共に幼児の発達にとって重要な役割を担っており、それぞれが十分にその機能を発揮することが大切であることはいうまでもないが、重要なのは、それぞれの役割を理解し、それぞれがお互いの立場を尊重すること、それぞれの機能がよりよく発揮するように支え合うことである。

では、幼稚園での充実した生活を改めて考えたときに、それを実現するための具体的な環境とはどのようなものなのか、つまり、幼児の生活をよりよくするために幼稚園としての役割は何であろうかということをも具体的に明らかにしていくことが今後の課題となった。具体的に環境について考えるということは、日々の保育を見直すことでもある。一つの教材からどれほどまでに遊びが展開していくか、遊びを充実したものにするための教師の役割とは、また、幼児自身が主体的に生活にかかわっていく姿とは等、幼児期に大切にしたい豊かな体験、環境、暮らしとは何かを今後の研究の中で明らかにしていきたい。